

日本滞在記

周 康根

住友金属工業(株) 鉄鋼技術研究所

はじめに

中国から留学生として日本に来たのは、8年前の1984年10月、中国湖南省の長沙市にある中南工業大学を卒業してから1年後のことである。同大学は非鉄金属工学を中心とする大学で、私の専攻は冶金物理化学であった。

来日後は、秋田大学の鉱山研究科で冶金学を学び、秋田美人の町で2年半を過ごした。その後、東北大学の工学研究科で金属学を専攻し、青葉城を眺めながら、4年間を楽しんだ。そして昨年から学園生活に別れを告げ、現在に至っている。

さて、中日両国の研究生生活を比較しながら執筆してほしい、とのことだが、私自身は中国における研究経験が少なく、中国の大学の研究事情について知らないことが多いし、会社に関してはなおさら無知である。この要望に答えられないかもしれないが、中日両国の大学での体験に基づいて感じたことを述べて行きたい。

入学試験と受験競争

合格発表の日、大学構内には異常ににぎやかな空気が漂っていた。掲示板の前には、嬉しそうにはしゃいでいる人、万歳している人、涙を滲み出している人、様々である。この風景を見ると、思わずご苦労様と言いたい気持ちになった。

研究室で話を聞くと、日本では共通一次試験(現在では、センター試験)と各大学で独自の試験を行い、学生の選抜を行うという。受験生の中には、1日5～6時間の睡眠時間しか取らずに、頑張ってきた人が多いということだった。国の別を問わず、受験生は大変だと思った。

中国では全国統一試験のみが行われている。大学も各種専門学校もすべてこの試験の成績を選抜の基準としている。中国の大学は、重点大学と一般大学に分けられている。重点大学、一般大学と専門学校は、それぞれ合格ラインが定められている。希望大学は、北京、清華(北京市)、復旦大学(上海市)のような大都市の名門大学が特に人気が高いが、入学願書の提出が試験後になっており、自分の成績がおおよそ見当つくので、それに相応した大学を選ぶのが一般的である。

この統一試験は文科系と理工系に分けている。当時では特に疑問視しなかったが、1つの大きな問題があると、今では思う。それは、文科系の受験生は理科系の科目を、逆に理科系の受験生は文科系の科目をほとんど勉強しなかつ

たことである。学校側も合格率を上げたい一心で、文科系と理工系を分けて授業していた。

さて受験競争であるが、中国も日本と同じ学歴社会であり、だれもが大学を目指すわけである。日本の大学・短大進学率30数%と比べ、中国のそれが2～3%程度であり、受験競争は日本よりもさらに厳しい。

最近、日本では受験勉強を中心とする教育現状の是非を問う議論がなされ、一部の大学で推薦入学の枠を設けることが試みられているという報道があった。それを聞いた時、中国のことを思い出した。

実は、中国では文化大革命期間中に大学の入学試験制度が廃止され、学生選抜はすべて推薦によって行われた。推薦入学といっても公正な基準があったわけではなく、学生の成績とは関係なく、親の地位、コネが一番ものを言う世界であった。そのため、文革中の学校は、ひどい状況であって学生の学習意欲はほとんどなかった。私の中学校のクラスの中では、先生いじめを楽しみとする人もいた。

入試制度が復活したのは、1977年、中学校2年の時であった。皆に大学の門が開かれるようになってからは、人が変わったように皆がまじめに勉強に取り組み始めたのである。

現在の日本の推薦入学は、厳格な基準があると信じているが、誰にも公正で、学生の学習意欲を引き出せるものであってほしいと思った。

学園生活

【授業風景】先生に特別許可して頂いて、学部生の授業を受講した。授業が始まってから教室に入ってくる学生がかなりいたし、授業中に大胆に机に伏せて居眠りしている人も少なくなかった。出席を取らない先生の授業は明らかに人が少なくなる。日本社会では規則や時間に厳しいと聞いていたので驚いた。試験の直前になると人からノートを借りてコピーする風景を見ると、なおさら不思議に思った。私が中国にいた時には、遅刻、無断欠席や居眠りする学生は減多に見かけなかった。

周囲の学生に話を聞くと、大学に入るまでは大変だったし、社会人になってからはまた忙しい日々が待っているから、とりあえず大学で遊んでおこうという感じの話が帰ってきた。私も一理があると納得した。逆に中国では社会人になってからの努力が足りないじゃないかとも思った。

【学生生活】日本の学生の多くは、立派なアパートに住

み、車を乗り回している。自分の大学生活を思い出し、羨ましいと思った。中国の大学は基本的に全寮制である。私の場合、25㎡程度の部屋に8人が詰め込まれた。部屋の中には、家具と言えるほどのものがなく、ベッドと机、それに本箱とスーツケースくらいしかなかった。娯楽と言えば、スポーツをすることと、映画を見ることくらいであった。テレビは寮の娯楽室の中の1台だけであった。今思えば、大学生活は本当に質素そのものであった。しかし、4年の大学生活は勉強に専念出来て、非常に充実していたと感じている。今ではテレビを見ている時が増え、すっかり本を読まなくなったことを考えると、よい環境があればよく勉強できるとは限らないようである。

【研究風景】夜遅くまで実験をする学生の姿は日本でも中国でもよく見かけた。実験装置や分析装置が日本ほど豊富にないが、学生の立場からはそんなに違いを感じない。しかし、教職員の立場から見るとかなり事情が違う。国から支給される研究費が非常に少なく、それだけでは実験が成り立たない。国家プロジェクトに関係する研究、企業からの委託研究を請け負って研究費を稼がなければやって行けない。

大学生の就職

就職活動の時期になると、研究室にOBの出入りが頻繁になってくる。卒業生は面会や会社訪問などで忙しそうであるが、皆生き生きとした顔をしているように見えた。就職先が決まって嬉しそうな顔をする人を見ると、自分で就職活動をし、好きな会社へ入れるのはすばらしいと思った。

中国ではかなり事情が異なる。国家統一分配（配属）という制度がある。国から学科ごとに受け入れ先が与えられ、その中で卒業生各自の就職先を調整する仕組みになっている。原則として地元希望者を優先するが、成績の良かったものは就職時に有利になる。卒業生の人数分の受け入れ先しかないの、当然自分の就職先に不満な人が出てくる。いやなら、自分で就職先を探すことが出来ないわけではないが、極めて困難である。日本のように就職情報が出回っていないし、大学側も会社側も個人の就職活動をバックアップする体制が存在しない。

ちなみに、帰国留学生に対しては統一分配制度がない。就職活動をバックアップする留学生サービスセンター（サービスセンター）があるのみである。

就職先に関して、“新西蘭”と“天南海北”という学生言葉がある。“新西蘭”は、本来ニュージーランドの意味であるが、転じて大学生が赴任しながらない辺境の新疆、西藏（チベット）、蘭州を指す。“天南海北”は、大都市・天津、南京、上海、北京の略で、大学生が希望している赴任先である。

私は、心情としては自由な就職活動が望ましいと思うが、よく考えると中国の事情もある。それは研究者、技術者の不足である。年間大卒者数を見ただけでも、中国の28万人は、日本の221万人（1984年）に比べて圧倒的に少ない。日本でさえ、中小企業の求職難が取りざたされている。自由な就職になったら、“新西蘭”のような辺境の人材確保は深刻化し、地域の格差はますます広がるだろうと、割り切れない気持ちである。

日本語

ある日、路上でタクシーを拾った。喋り好きの運転手だった。暫く世間話をしたら、「お宅、どこの出身ですか」と聞かれた。「中国です」と答えた。すると、「中国の何県ですか」とさらに聞かれた。一瞬、何のことかとおもった。実は中国地方の人と勘違いされたのである。日本人と勘違いされるぐらいの日本語を喋れるようになったと、うれしく思った。

日本語は漢字を使うので非常に有り難かったが、思わぬところに誤解を招いたことがある。一例だけ紹介したい。

来日まもなく、宴会上で日本人の友人に「もう一杯どうですか」と酒を勧めた。「いいです」と言われて酒を注ごうとしたら、「いいと言ったのじゃないか」と妙な顔された。私は「いいといったのに」と訳わからなかった。“いい”は、漢字では“良”と書き、中国語に訳すと“好”であり、肯定の意味になる。この場合では“要らない”を意味することが後になってわかった。“注いでくれなくてもいい”の略だろうと、今では自己解釈している。

おわりに

今、中国は改革、開放政策の最中にあり、大学の様子も日々変化しつつある。ここで書いたことは、一部がすでに過去のものになっているかもしれないが、少しでも中国の大学生活を知って頂き、留学生と日本の皆さんの理解を深める助けになれば幸いである。

（平成4年12月9日受付）